



日本海海戦を
転機とした男たち

7

鈴木貫太郎 鬼の艇長と呼ばれた男と終戦

「第四駆逐隊の艦長は皆が一隻ずつ引つ組んでやるつもりだから、四隻は引き受けます」

日露戦争中、バルチック艦隊との決戦に向けて、その意気込む男がいました。鈴木貫太郎——後に総理大臣となつて、太平洋戦争の終結に尽力した人物です。

当時、第四駆逐隊司令だった鈴木は、普段は温厚ながら、戦いにおいては妥協を許さぬ性格で、猛訓練に励んでいました。

そんな彼についての異名は「鬼の艇長」「鬼貫」——いかに畏怖される存在だったかが窺えます。

水雷戦の練度を高めた彼は、第四駆逐隊（「朝霧」「村雨」「朝潮」「白雲」）は、敵四隻を引き受けると豪語。それに対し、参謀長の加藤友三郎は、

「そんなに欲張らんでも良いから一隻でもやってくれ」と応じたといひます。

そして、いよいよ幕を開けた日本海海戦。第四駆逐隊は決戦当日の夕方から開始された掃討戦で、敵の砲撃を受けながら



鈴木貫太郎
(国立国会図書館蔵)

も阿修羅のごとく海を駆け、戦艦「シソイ・ヴェリキイ

「ナヴァリン」の二隻を撃沈する大戦果を挙げたのです。

時は流れて太平洋戦争末期の昭和二十年（一九四五）四月、鈴木は重臣会議で

次の総理大臣に推されますが、「軍人は政治に関与すべからず」という信念から固辞しました。

しかし、昭和天皇から直々に懇請され、その役目を引き受けます。

昭和天皇の意を受け、終戦工作に奔走した鈴木は、戦争継続を主張する一部の将校から私邸を襲撃されても一向に怯まず、戦争を終わらせることに邁進しました。

海軍の後輩で、ロンドン海軍軍縮条約締結に尽力したことで知られる山梨勝之進は戦後、「鈴木大将だからこそ終わらせられた」と語っています。

もし普通の文官が首相であれば、周囲から臆病者と揶揄され、降伏反対派の圧力に屈していた。しかし、「鬼貫」と呼ばれ、その勇氣と胆勇では、海軍の誰もが知る鈴木だからこそ成しえた——というのです。

明治、大正、昭和と第一線で海軍を支えてきた「鬼」が、深く負けを受け容れて戦いを終わらせようとする姿は、多くの軍人の心に響いたのかもしれない。



日本海海戦で旗艦として戦った戦艦「三笠」は、大正15年（1926）に記念艦となり、現在の位置に固定されました。

「三笠」入口で「本誌を見た」と言われた方は入艦料を100円値引きします（一般のみ）。

入艦料	区分	一般	シニア	高校生
1名	一般	600円	500円	300円
	20名以上	500円	500円	200円

観覧時間	4月～9月	3月・10月	11月～2月
	9:00～17:30	9:00～17:00	9:00～16:30

